

## INTERVIEW

真鶴町国民健康保険診療所 管理者兼診療所長  
大平祐己先生



# 診療所の外で、地域の中で、 町の人とつながりたい

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

## 卒業生の義務年限で、被災前の女川町に赴任

山田隆司(聞き手) 今日は真鶴町国民健康保険診療所の**大平祐己先生**にお話を伺います。私が大平先生に最初に会ったのは女川町立病院(現 女川町地域医療センター)で、震災前でしたよね。今日はまず先生が自治医科大学を卒業してここに至るまでの略歴をお話いただけますか。

**大平祐己** 私は福島県の出身ですが、仙台の高校に通っていました。当時は出身高校の存在する都道府県しか選択できなかったの、宮城県から自治医大を受けて入学しました。

2006年に卒業して、国立病院機構仙台医療センターで初期研修を受け、登米市の病院の内科に2年間勤務しました。当時の宮城県は専門

が何であれ内科や外科といったメジャーな科で義務年限を行う流れがありました。そこで上部、下部内視鏡も一緒に学ぶことができました。

5年目になって、次の異動先を選択する際に、それまで派遣先にはなかった女川町立病院が新たに派遣先として上がり、自分は地元が海に近かったこともあって親和性を感じ、女川に希望を出して行くことになりました。

**山田** 震災前ですが、女川町から協会が病院の運営を依頼されて私が関わっていました。指定管理に向けて齋藤充先生に赴任してもらったのですが、先生が赴任されたのはその頃ですか。

**大平** 私が赴任したのはちょうど齋藤先生と同じタ

イミングでした。

**山田** そうでしたか。それまでにいた先生方がおおむね移動されてしまったという状況の時でしたね。女川に赴任して、どんな印象でしたか？

**大平** 当時はまだ病院だったので入院病床もありましたが、外来で患者さんに接する機会が多く、訪問診療も初めて経験しました。自分の性格として面と向かって人と話すのはあまり得意ではないので、学生時代には外来は苦手なのではないかと思っていたのですが、やっているうちに「そうでもないな」と気づきました。患者さんとの触れ合いや、診察を継続していく中で、その患者さんの生活の様子、それまでの人生の様子というものが少しずつ分かってくる楽しさ、面白さを感じるようになったのが、女川の時代です。

**山田** 町唯一の病院でもあり、町民には気さくな漁師さんも多く、町民と近い病院でしたよね。

**大平** そうですね。

**山田** そうしているうちに、3月11日を迎えたわけですね。

**大平** 実はその日は女川にいなかったのです。当時、家族は都内に住んでいて、私はいわゆる単身赴任で、週末、東京に帰るといった生活でした。その日は偶然にも私用があり、休みを取って都内に帰っていました。そういう意味では、家族に

命を助けられたように感じる部分がありました。一方で、病院が大変なことになっているだろうという時に、自分がいることができなかったということ、申し訳なさも強く感じました。女川の被災の状況は翌日にならないと分からず、とても心配でした。

**山田** 気仙沼の火災や、仙台港の様子などは報道されていたけれど、女川のことは翌日も映像がほとんど出てきませんでしたよね。女川原発もあるし、酷いことになっているのではないかと私も絶望的な気持ちになりました。震災翌日に支援物資をかき集めてヘリコプターに載せて飛びましたが、女川上空は自衛隊の統制下にあり着陸できず、2回ぐらい旋回して白石まで戻りました。白石に支援物資を置いて私は東京に戻り、その後DMATで入った宮崎国久先生たちがその支援物資を月曜日(14日)に運んでくれました。

当時吉新通康理事長たち幹部が海外出張中で、月曜日に折茂賢一郎先生に連絡して災害対策本部を協会の本部に立ち上げ、どういう支援体制を組むかを相談して、火曜日にまたヘリで女川に向かいました。その時、先生も一緒でしたよね？

**大平** はい。その後も何回かヘリに乗せていただいて、女川に通いました。

## 女川で決めた家庭医の道

**山田** そうすることで、先生は齋藤先生の片腕として、その後被災地の医療に従事したのですね。

**大平** 2年目の終わりに異動の話も出たのですが、

もう少し続けたいと考え、結局4年間いました。

**山田** 4年間ということは、震災後に3年ということで、一番大変な時ですね。避難所も結構長かつ